

「自然ってとおいんだなあ」と 書かれていた一文を体感する撮影であつた

白神山地が屋久島とともに世界自然遺産に登録され、三十年が経過した。

あの頃は高速道路がなくて、早朝の五時には車で家を発つて、二時間ほど走り藤里町に入ったが、そこからは林道をひた走り、世界遺産の山並みの見渡せる小岳の頂上へ達するのは正午近くであつた。「自然って遠いんだなあ」と書かれていた鎌田孝一さんの著書「白神山地に生きる」の一文を体感する撮影であつた。

遺産登録のきっかけは、旧八森町が青森県西目屋村につながる林道建設計画を発表し、秋田、青森の反対運動が全国的な支援を受けて建設中止になったことだ。1985年秋田市で「ブナ・シンポジウム」が開

かれ、哲学者の梅原猛さんが「白神は自然と共生するブナ帯文化（縄文文化）の基層なのだ」と講演した。

ブナ帯文化という反対運動のよりどころになったフリーズは、今は耳にする機会もなくなったが、2021年に「北海道・東北の縄文遺跡群」が文化遺産に登録する礎になった。

遺産登録は、一過性のブームで終わるのか。「保全と利用」を目的に関係する自治体の活動は継続されているが、秋田と青森では遺産地域への対応が異なり、秋田の入山禁止は「行つてはならない山」と認識されてきたというのだ。2004年に八・三万人であつた入山者が、2021年には

二・三万人に激減している。

遺産地域にある四つの自治体（秋田・一、青森・三）が、観光振興と自然保護に取り組んできたが、利用を進めるのはハンディがあるという。国内には五ヶ所の世界自然遺産があつて、白神以外の地域は国立公園に指定され、国からの支援も多く恵まれているのだ。白神の国立公園化は、厳しい課題だ。

「自然って遠いんだなあ」と冒頭で述べたが、私の撮影地も岳岱、小岳、二ツ森、暗門の滝などいずれも世界遺産の緩衝地帯で、核心部には入つてない。入れないのだ。そして、観光というニュアンスには馴染まないアクセスの不便さと、雪の無い半年間だけの営業期間を強いられる。